

中國出土資料學會
平成23年度第1回例会

日時：平成23年7月16日（土）
受付開始 12：30～
研究報告 13：00～17：00

場所：成城大学3号館2階322教室
会場へのアクセス：小田急線・成城学園前駅より徒歩3分

報告Ⅰ 濱田 倫子（東京大学大学院人文社会系研究科）

発表題目：漢代中国における厨房の世界観—— 竈型の宇宙と死者昇天の経緯について——

発表概要：竈の宗教的意義をめぐる従来の研究は、文献を用いて“竈神”及びその祭祀の性格を解明することに重点が置かれていた。しかし本発表では、竈という“モノ”に着目することで、それとは異なる角度から漢代の死生観における竈の在り方を捉え直してみたい。具体的には、漢代の副葬品である陶竈の模型を網羅的に採集し、そこに描きこまれた図像や造形への検討を行う。そして、炉台・釜・甑・蓋（盆）を重層的に重ねた竈の構造そのものに宇宙としての象徴が読み込まれ、また水火を用いた煮炊きの在り方の中に死者昇天の経緯が意識されていた可能性について論じてみたい。

報告Ⅱ 陳劍（復旦大學教授・東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所客員教授）

発表題目：清華簡《金縢》研讀

発表概要：最新發表的《清華大學藏戰國竹簡（壹）》中自題為《周武王有疾周公所自以代王之志》一篇，大致與今本《尚書·金縢》相當，也有不少出入。本演講將在原整理者和其他學者研究的基礎上，首先討論篇中個別疑難字詞的釋讀，盡量疏通簡文；重點討論簡本跟今本不同之處的關係，推測其形成原因，闡明簡本對正確理解原文的意義等。

報告Ⅲ 石川 三佐男（秋田大學名譽教授・新楚辭學文庫）

発表題目：近年の楚辭研究に見る多彩な成果と新たな動向について

—兼ねて古代楚王國の國策と楚辭諸篇及び楚竹帛書類の關係に及ぶ—

発表概要：今回は標記題目のもと前編（基本的考察）と後編（發展的考察）に分けて報告します。

前編では近年の楚辭研究に見る国内外の成果を十餘類（楚辭國際學術研討會成果集類・中國學者個人全集類・中國學者個人著作類・大型工具書類・中國若手研究者博士學位論文論著類・日本學者個人著作類・科研取組類・國內外個人論文類・楚辭

関連出土文献類・楚辞関連諸科学類等)に分けて点描し、学術史上の未解決問題や議論の飛躍事例、及び戦国楚竹帛書等出土文献文物類を活用した新たな動向の紹介に努めます。後編では(1)①他諸侯国より遙か以前に先鞭をつけた春秋初期来の楚の「稱王」政策、②春秋期楚の莊王(五霸之一)の九種の古典(『春秋』『世』(先王的世系和事跡)『故史』(前代的成敗得失)『訓典』(古帝的訓典)等)活用による太子教育重視政策(戦国楚竹書「莊王 成」に見える莊王と重臣の楚覇に関する問答も参考)、③春秋期に成る楚王国の歴史書『檮杌』(他「三墳」「五典」「八索」「九丘」)、④当該作品が描く歴史的教戒内容と下限、これら四領域に渉る一定の関連性に基つき、楚辞天問篇は元來、一個人の不遇を訴えた作品ではなく、東周王室に代わって天命を受け天下統一(楚覇)を圖るための楚王国の國家的教材であり、制作時期も春秋末期を下らないことを推斷します。(2)離騷篇に見える一塊の楚王教戒詩群は天問篇の主題や内容を繼承していることを特定し、これにより春秋末期に成る天問篇と戦国中期懷王時に成る離騷篇の関係を解明し、兼ねて離騷等楚辞諸篇の主人公の昇天目的を推斷します。この間、楚の道家系巫覡祝史集團が楚王国の天命招來問題や楚辞諸篇に深く關與していることを指摘します。(3)楚王国國策と戦国楚竹帛書等出土文献文物類(「凡物流形」「有皇將起」等楚辞類作品、中原儒教文化を隱微に批判する道家思想書類、懷王時の「字書」制作による文字統一の動き、同楚王国の歴史書「楚居」制作、同荊州熊家冢(懷王熊槐と直接關係するだろう)楚王墓出土「(華蓋附)一車駕六馬」、あるいは漢代画像石「楚王(懷王)泗水昇鼎失敗故事」等)も緊密に關係していることを推斷します。以上により古代楚王国の國策と楚辞諸篇及び戦国楚竹帛書等出土文献文物類は、元來切り離しては楚文化の實相に迫り得ない緊密な關係下にあることを明らかにします。

☆参加費(資料代) 500 円

☆非会員の来聴を歓迎します

連絡先

〒113-0033

東京都文京区本郷7-3-1

東京大学文学部

中国語中国文学研究室 大西研究室

Tel 03-5841-3822 (直通)

Fax 03-5841-3823

E-mail : office@shutsudo.jp

郵便振替口座 00180-5-13124